

論文名：術前顎矯正治療を行った片側性唇顎口蓋裂患者の外鼻形態の変化（要約）

新潟大学大学院医歯学総合研究科

氏名 市川 佳弥

【目的】

術前顎矯正治療のひとつである術前鼻歯槽形成（以下、PNAM）治療による外鼻形態への治療効果を明らかにすることを目的に、治療開始時から口唇形成術後の経過観察の期間まで継続的に評価を行った。

【対象・方法】

対象は新潟大学医歯学総合病院矯正歯科にて出生時から治療管理を開始した片側性唇顎口蓋裂 17 例のうち PNAM 治療を行なった 12 例（男児 6 例、女児 6 例）を PNAM 群とし、対照群として PNAM 治療を行っていない 5 例（男児 2 例、女児 3 例）を non-PNAM 群とした。

資料として、正面および鼻孔位にて、初診時（T1）および口唇形成直前（T2）、口唇形成後約 6 か月経過時（T3）の 3 時点で撮影した顔面写真を用いた。7 つの計測項目を設定し、両群間における T1、T2、T3 での平均値と、T1-T2、T2-T3 での変化量を比較し、統計学的に検討を行った。

【結果および考察】

T1 では、PNAM 群と non-PNAM 群において全項目で有意な差を認めなかった。T2 では、non-PNAM 群に対し PNAM 群で鼻尖傾斜角、鼻柱傾斜角、鼻孔位鼻翼基部傾斜角が有意に小さな値を、患側鼻孔上縁角が有意に大きな値を示した。これに対し、T3 では、正面鼻翼基部傾斜角においてのみ、PNAM 群が有意に小さな値を示した。

T1-T2 および T2-T3 における変化では、PNAM 群は全ての項目ではないものの T1-T2、T2-T3 の両方で有意に変化が認められた。これに対し、non-PNAM 群では T1-T2 における有意な変化は認めず、おもに T2-T3 にのみ有意に変化を示した。これは、non-PNAM 群では術前の外鼻変形の大半を口唇形成術のみによって改善していることを意味していると考えられた。

【結論】

PNAM 治療は口唇形成術施行までに外鼻形態の偏位を改善させ、手術による組織移動量を減少させることができ、結果として術後の後戻りの軽減にも寄与する可能性が高いと考えられた。